

四旬節第三主日

2012.3.11

ヨハネ 2・13-25

今日の福音は、今私たちが聴いたように、イエスがエルサレムの神殿で行われた驚くべきことを語っています。今日の福音が語る、エルサレムの神殿でイエスが行われたことが、私たちにとって、何故驚くべきことかという、そこには、私たちのイメージの中にあるイエスとは、はなはだしく異なったイエスのお姿が語られているからです。福音書の中に伝えられているイエスの数々の奇跡のみわざも、確かに、はじめてそれを読んだときには、私たちにとって、とても信じがたい驚くべきことでした。けれども、今日の福音のイエスの行為が私たちにとって驚くべきことであるのは、それとは異なる驚きです。カトリック信者となることによって、私たちはイエスに対するイメージを持つことが出来るようになりました。その私たちのイメージの中のイエスは、悪霊や病によって苦しむ人々、障害を負った人々を深くあわれみ、悪霊を追い払い、病を癒し、障害から自由にしてくださる、慈愛に満ちたイエスです。福音書に語られている、イエスが行われた数々の奇跡のみわざは、確かに驚くべきことですが、私たちはカトリック信者としてそのようなイエスを信じる者となっています。私たちにとって私たちが信じているイエスは、その大いなる力をもって私たちの願いに答えてくださる、いつくしみ深い救い主です。だからこそ、今日の福音に語られている、エルサレムの神殿でのイエスのお姿は、私たちにとって驚くべきことであるのです。

今日ミサの中で聴いたイエスがエルサレムの神殿で行われたことは、他の福音書では、イエスの受難に先立つイエスのエルサレムでの最後の日々の出来事として語られています。そしてそれは、イエスは何故、神殿の祭司長を中心とした当時のユダヤの指導者たちによって十字架の刑に引き渡されることになったかということの直接的な理由として語られています。それに対して今日のヨハネ福音書では、カナの婚宴での出来事に続いて、エルサレムの神殿に上られたイエスがそこで最初に行われたこととして語られています。今日の出来事を語るヨハネ福音書には他の福音書とは異なる独特の意図があると受け止めることが出来ます。

カナの婚宴で水をぶどう酒に変えたイエスの奇跡を語った後に、ヨハネ福音書は次のような結びのことばを記しています。「イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。」ヨハネ福音書では一貫して、イエスが行われた驚くべきわざを指して、それを「しるし」というふうに表現しています。「しるし」という表現を用いる

ことによって、ヨハネ福音書が言おうとしていることを理解するためには、ヨハネ福音書のはじめに語られていることを想起するとよいかもしれません。ヨハネ福音書1章14節には次のように語られています。「ことばは肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理に満ちていた。」。ヨハネ福音書の中で語られる、カナの婚宴での出来事をはじめとするイエスが行われた力あるわざは、私たちの世界に一人の人として来て下さった、神のみことばであり、父の独り子であるお方、つまり、弟子たちが見ることの出来た主イエス・キリストの栄光の「しるし」として語られているのです。そしてその「しるし」は、ヨハネ福音書を読む私たちをイエスに対する信仰へと促す「しるし」として語られているのです。

今日の福音には、カナの婚宴やその他の所でイエスが行われた奇跡的なことは語れていません。けれども、今日の福音でイエスが行われたことには、「しるし」としての深い意味が込められていると、ヨハネ福音書は語っているのです。

エルサレムの神殿の境内で、いけにえにささげるための動物を商っていた商人たちや、神殿だけで用いられる特別な貨幣の両替をしていた両替商たちを追い払われたイエスの行為には「しるし」としての深い意味が込められていたことを、ヨハネ福音書は旧約聖書と重ね合わせながら語っているのです。ヨハネ福音書が私たちに示そうとしているこの場面でイエスが与えている「しるし」は、普段私たちがあまり読むことのない、旧約聖書のゼカリア預言書の最後に語られていることと関係しています。ゼカリア書の最後の14章には、世の終わりの主の日の幻が語られています。その終末の主の日には、エルサレムに向かって攻め寄せる諸国の民に対して、イスラエルの主である神はその大いなる力をもって最終的に勝利を収め、エルサレムは諸国の民の中に残された者たちが巡礼のために上ってくる、礼拝の場となります。そしてゼカリア書の最後は、「その日には、万軍の主の神殿には、もはや商人はいなくなる。」という一文で締めくくられています。ヨハネ福音書は、エルサレムの神殿でイエスが行われたことを、ゼカリア書の終末の主の日と重ね合わせて示そうとしているのです。イエスがエルサレムの神殿で行われたあのようなことは、旧約の預言者たちが語っていた終末の決定的な神の行為のしるしであるとヨハネ福音書は私たちに語ろうとしているのです。イエス・キリストというお方において、今や神は決定的な仕方で終末的な出来事を始められたということを語ろうとしているのです。

「このようなものはここから運び出せ。わたしの父の家を商売の家としては

ならない。」イエスが行われたことを目の当りにし、イエスのこのことばを聞いた弟子たちは、「あなたの家を思う熱意がわたしを食い尽くす。」という聖書のことばを思い出したと語られています。ここにも、イエスがエルサレムの神殿で示された「しるし」があるとヨハネ福音書は告げているのかも知れません。弟子たちが思い起こしたと言われている聖書のことばは、詩篇 69 の中にある一節です。詩篇 69 の 10 節を見ると、そこには次のような嘆きの歌が歌われています。「あなたの神殿に対する熱情がわたしを食い尽くしているので、あなたを嘲る者の嘲りが、わたしの上にふりかかっています。」あなたを嘲る者とは、ヨハネ福音書の文脈に戻って考えてみると、神の聖なる神殿で商いをしている者たちです。そしてそれを黙認し、そこから利益を得ている、自分たちこそ神に仕える者であると自負していた人々です。イエスが神殿で行われたことを見ごしにすることが出来なかったそのような人々の手によって、イエスは十字架の死に追いやられたと、ヨハネ福音書以前に書かれた、他の福音書は今日の福音の出来事をイエスの受難に結び付けて語っています。ヨハネ福音書は弟子たちが思い起こした詩篇のことばを記すことによって、イエスの十字架の死の意味を前もって、私たちに語ろうとしているのです。イエスは、エルサレムの神殿をこの人の世におけるご自分の栄光の住まいとして選ばれた神の栄光が人々によって汚されているのを見て、その神の栄光を回復するために、神の栄光をこの人の世に保ち続けるために、敢然と立ち向かい、そして、自分たちこそ神に仕える者と自負していた、この世の人々の手によって十字架に追いやられ死んで行かれたのです。そのようなイエスのお姿は、イザヤ書に記されている主の僕の姿を思い起こさせます。

けれども、十字架の上に死なれたイエスは、今日の福音が語っているとおり、死を越えて復活されることによって、この世の人々が汚し尽くした、神の栄光をこの私たちの世に示してくださったのです。「この神殿を壊してみよ、三日で立て直してみせる」イエスが言われたこのことばを、「イエスが死者のうちから復活したとき、弟子たちは思い起こし、イエスが言われたのは、ご自分の体のことなのだ」と悟り、聖書とイエスの語られたことを信じた。」とヨハネ福音書は今日の福音のエピソードを結んでいます。人々によって汚された神の栄光は、今や、イエスの復活によって、私たちのうちに輝いている。これこそが、イエス・キリストの復活によって、この私たちの世に示された神の栄光の姿であると、ヨハネ福音は私たちに告げているのです。

それにしても今日の福音の最後に語られていることが気になります。イエスの行われたしるしを見て、「多くの人がイエスの名を信じた。しかし、イエスご自身は彼らを信用されなかった。イエスは何が人間の心の中にあるかをよく

知っておられたのである。」これが今日の福音の結びのことばです。

エルサレムの神殿の祭りの賑わいを、あのような透徹した目でご覧になったイエスは、大震災から一年過ぎた、私たちの心の中にあるものをどのように御覧になっているのでしょうか。

今日のミサの中で、そのイエスの眼差しを受け止めて、この一年、人々の心の中にあったもの、私たちの心の中にあったものを見つめ直したいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高